
The Problem Hunter

男と女座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Problem Hunter

【Nコード】

N1258BA

【作者名】

男と女座

【あらすじ】

トレジャーハンターのビル。彼はガンラン使いにて、重度の火薬の匂いフェチ。彼や他の仲間のハンター達は、ハンターズギルドでも有名な問題ハンター達だった。

友人に触発されて書き始めました。本作はMHPシリーズにMHFのモンスターやシステムを一部取り入れています。また独自のモンスター、エリア、武器・防具やアイテムがあります。どうかご了承を。

初投稿に加え、残念な表現力かと思いますが、よろしく願いしま

५.

ビル 怒りの脱出（前書き）

いきなりピンチ？な主人公ビルくん。

旧大陸の雪山にこんなモンスターと、最初からやっていますがよろしくお願ひします。

くメモく

旧大陸 MHP2G以前及びMHFの舞台の大陸

新大陸 MH3、P3の大陸

ビル 怒りの脱出

俺は走り続けていた。

昼過ぎだというのに旧大陸の雪山の激しい吹雪は夜と思わせる程に暗く、露出した顔面を雪が痛めた。

マフモフ装備の暑さの中でガンランスの盾や荷物、更には負傷したハンターを抱えて走るのは辛い。時折顔に当たる、臭く温かい物は血なのだろうか。顔を拭きたいところだが、後ろから今も追ってくるヤツを考えると、そんな余裕はない無いほどに切羽詰まっていた。

そもそも間違いは…ポツケ村に里帰りした時、村長から新米ハンターの搜索依頼を油断して請けた所からか？マフモフ装備や土産物の真ユクモノ銃槍ではなく装備をもっと考えるところか？新大陸を越えて来た、とあるモンスターの情報と最後の目撃情報と雪山の近さから推測しなかったからか！？

ズズン！とすぐ後ろで地面が揺れた。危うく転倒しそうなのを堪え、また一気に走り出す。その際の衝撃でも腹部に受けたのか「あ、あれ…？」と荷物は間抜けな声を上げながら目を覚ました。今すぐ放り投げたいが我慢した。

「う、うわあああああ！？」

間抜けな叫び声に、放り投げたくなる思いをこらえて俺は叫んだ。

「追われてるのは理解しただろ！あの洞窟に行くから閃光玉投げろ

「!!」

無事に逃げられた俺達は、山頂付近の小さな洞窟の中、残り少い薪で焚き火を灯して暖をとった。

「血止めは出来たか？」

「はい。すみません…、ビルさん。」

出血が激しかった様だが、幸いにも手持ちの道具で手当てが出来た。ちなみにとビルは俺の名前だ。今頃はポツケ村の温泉に浸かっている頃だったろうに…。泣きたくなくなるが、空腹では話にならない。アイテムポーチから取り出して、腹しのぎに食べようとするホットミートが、最期の食事にならないと良いんだが…。

「あのモンスターは何なんですか？」

「狂暴竜イビルジョー」

「イビル…ジョー？」

「知らなくて当然だ。この大陸には生息していない筈だったんだがな。食料を求めて来たのかもな。……それとも……。」

頭に？を浮かべてコチヲを覗きこむ新年の視線に「いや、なんでも」と返して一応説明を続けた。

「本来ならプロから接触が許される獣竜種だ。」

「危険つて事です…よね？ボクも出会い頭に尻尾の一撃で飛ばされて…。」

「お前さんは運が良い。喰われる前に俺が見つけたんだからな。」

笑うと思っただが、新米は全然笑わなかった。…まあ話題を変えるか。

「ティガレックスと縄張り争いをしていたらしい正体不明のモンスター。このニュースは知っていたか？」

「はい。ティガレックスが勝利したらしいですけど…。」

「問題は遺体が無かった事。ティガがイビルを倒してくれたら良かったんだが、アイツの食欲は底なしだからな…。この雪山まで来ちゃまったようだ。」

「あ！まさか僕のターゲットのフルフルは！？」

「……………。巢の洞窟に“食べ残し”なら見つけたか？」

「そんなア…昇級試験だったのに…。」

イマイチ事態が飲み込めていないヤツに少し怒りが込み上げた。

「…俺は閃光玉投げろと言ったよな？でお前さんは持ってないから、俺の鞆から出せ。」て言ったよな？」

「はい…。すみません。」

流石に謝った。まあ事態の悪化の原因を理解しているようだ。

「でお前さんは散々テンパって何を投げた？」

「あ、貴方の武器…です。」

そう、今の俺には武器がないからだ。しかも当ててすらいない。急いで助けに入った結果がコレだよ…。

「お前さんはガンナーか。」

「はい、パワーボウを使ってます。」

「だよなー。下位だよなー。」

明らかに火力不足だ。せめてもう少し火力があれば援護には使えそうだったが…。

俺の落胆っぷり見たせいか、本日の濃厚でイレギュラーな狩猟体験に心が折れた、といった感じだ。流石に俺も単独で もちろん新

米を当てにしてない　イビルは少しキビしい。

「もう…諦めて何処かに行きましたかね？」

「無理」と怒りを込めつつ、俺は淡々と続けた。「相手はもうお前の匂いを覚えてるだろうな。手負や獲物って事、俺がお前にガンランスを落とされた事もだな。

顔が一気に冷めるのを見ただけで心情が分かる。俺は俺で武器が無いから似た様な心境だと思いが。

「下山するには洞窟か崖を降りる道。だが崖は雪崩れで通れそうにないから…？」

「あのイビル…ルがいた場所ですか？」

「俺の武器もな。」

相手は「根に持つてるな。」と思っているんだろうが構わなかった。土産物のガンランスではあるが、今は頼れる唯一の武器。拾えろと心強いが、イビルに遭遇する可能性を考えると洞窟の安全地帯から出たくなる。

手持ちの薪を使い果たした頃、俺は覚悟を決めて洞窟の外へ出た。救援が来るかと少しは期待していたが望みが絶たれた以上、自分を

頼りにするしかない。

生と死の狭間へ向かうと思うと身体全体がゾクゾクと震える。俺は鼻先にガンランスの砲撃の薬莖を当てて。思いつきり息を吸った。

この香りは良い…。

俺の身体中に火薬の香りが廻るように、勇気と興奮を与えてくれる。身体の震えは大事な部分へ向い、熱く鼓動する。まだ俺は、いきたい。

「さ、行くか…。」

俺達は慎重に行動した。

吹雪の白闇の中、目を凝らし、少しでも異常が無いか進んだ。谷間の風が時々吹くとイビルの咆哮を思わせ、新米が何度か武器を構えた。

下山する為の洞窟への拓けたエリアに入ったが、相変わらず吹雪の白闇で先が見えない。

急に白闇を晴らす突風が吹き抜けた。俺は咄嗟に空いている右手でアイテムポーチに手を突っ込んだ。突風の中に独特の異臭が混じっていた。

「うわぁあああッ!!!」

またもや間抜けな声を上げた。晴れる白闇の中、洞窟の前にはイビルが立ち塞がっていた。

喜びか、怒りか。イビルが俺たちを見つめて、高らかに咆哮を上げる。俺の後のヤツが狼狽えて何か叫んでいるのが、ヤケにハッキリと聞こえた。

ボウッ！

新米が慌てて、俺が渡しておいた閃光玉を距離があるにもかかわらず投げやがった。イビルには光が届かずにピンピンしていたが、足元に鈍い光が反射した。ハツとして俺はイビルに走った。イビルは俺を迎撃するかの様に、器用に大きな雪玉を飛ばす。

放物線を描いて向かう雪玉の下の僅かな空間へ転がって回避。

（あぶねえな。）
足に雪玉がかすめてゾツとした。起き上がると同時に、閃光玉を投げた。

ボウッ！

閃光が輝くと同時に、俺はイビルの腹下に滑り込んだ。閃光玉の光で怯んだイビルへ急ぎ、腹の下に滑り込むと念願のガンランスを取り、中の弾丸を確認した。中部に問題はないようだ。新米が放った

パワーボウの矢が弾かれ、俺の上に降ってきた。貫通力の高い弓矢だが、イビルの体を貫く事は出来なかった。まあ期待はしてなかったが。

ポオオオオオオ…！

低い唸り声が俺の焦りを駆り立てる。俺は寝たままの体勢でイビルの腹部へ祈りを込めて引き金を引いた。

ズドオン！

溜めた砲撃の衝撃が体を伝わり、地面を揺らすがいビルには効果が見られない。残りは2発。

ズドオン！

「怯め！いや倒れる！むしろ死ね！」

ズドオン！

さすがの気持ちで溜め砲撃を撃つ。こんな事になるなら無茶をするべきじゃなかった。

「怯めつての！倒れて！お願い死んで！！！」

カチャン！

弾切れの音が焦りを募らせる。急いでクイックリロードをし、引き金を顎下へ向けて引いた。

ドカンッ！

イビルが砲撃を受けて怯む。直後、俺に嫌な予感が身体中を駆け巡った。イビルの全身の筋肉が赤黒く隆起し始めた。

「ヤバい！来るッ！！」

盾を顔に押し当てる様に構える。真上からの怒りの咆哮を盾でなんとか防げたが、大地はビリビリと揺れ動く。自分で狙った事とは言え、流石にコレは恐怖とか後悔に震えた。頭の中の俺は「こんな作戦やっぱ無茶！逃げた方が良いつて！」と危険信号を最大に振り鳴らす。

「黙ってる！俺の読み通りなんだからよ！！」

怒り状態のイビルに左脇腹には、怒りと共に吹き出した鮮血。まだ新しい大きな傷痕が現れた。俺は渾身の力を込めて、ガンランスを傷口に突き刺す。激痛の一撃にイビルも体を曲げて怯んだ。

「 竜撃砲、発射！」

ドガアアアン！！！！

ため砲撃とは比べ物にならない爆音が響く。竜撃砲の芳しい煙の中でイビルは緩かに崩れ落ちた。

(こんな無茶するモンじゃないな……。)

むせぶ様なイビルの臭い血や肉片の雨の中で、全身の力が抜けて大の字に寝てる俺は冷静に思った。

ポツケ村の村長からは多大な感謝と報酬を与えられた。土産のガンランスは新大陸の技術を楽しみにしていた武器屋の兄さんに渡せたが、イビルの臭いがやたら鼻につくのか、感謝しつつも引き笑いだった。

新米は集会場に行った。別れ際には何度も感謝に頭を下げられた。良いハンターになってほしいものだが……。まあ……。二度と組みたくはないが。

ビル 怒りの脱出（後書き）

いかがだったでしょうか？

次回は仲間も登場です。よろしく。

文字のミスやご意見、ご感想などがありましたらお待ちしております。
す。

どうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1258ba/>

The Problem Hunter

2012年1月3日01時52分発行